

メトロポリタン史学会 第6回総会・大会のお知らせ

来る4月17日(土)に、下記の要領でメトロポリタン史学会の第6回総会・大会を開催します。総会では今年度の活動を振り返り、会活動の強化を目指す方針を決めたいと思います。また大会では、「20世紀の戦争—その世界史的位相」をテーマにシンポジウムを行います。会員の皆さんの参加をお待ちしております。

- 日時 2010年4月17日(土) 午前10時30分～午後6時
- 会場 首都大学東京(東京都立大学) 本部棟1階・大会議室
(京王相模原線南大沢駅下車 徒歩約10分)
- 日程 ①総会：午前10時30分～12時
- ②大会：午後1時～6時 シンポジウム「20世紀の戦争—その世界史的位相」
〔報告者〕
木畑洋一氏(成城大学)
「帝国の総力戦」としての第一次世界大戦」
小野寺拓也氏(共立女子大学 非常勤)
「エイジェンシー(行為主体性)と「被害と加害の重層性」
—第二次大戦末期のドイツ国防軍兵士の野戦郵便から—」
加藤陽子氏(東京大学)
「太平洋戦争を「かたち」から考える」
山田 朗氏(明治大学)
「現代戦争の特徴と自衛隊の兵器体系」
〔コメンテーター〕
油井大三郎氏(東京女子大学)
佐々木隆爾氏(東京都立大学名誉教授)
- ③懇親会：午後6時30分～(会費4,000円)

〔シンポジウムの趣旨〕

戦争は、人間の歴史において、何時の時代にも絶えることはなかった。しかし、20世紀ほど「戦争の時代」という言葉にふさわしい時代はないであろう。「20世紀の戦争」は他の時代の戦争とどう違っていったのか。あるいは、「20世紀の戦争」は世界史的に見たとき、どのような独特の位相をもっていたのか。

このシンポジウムは、日露戦争に始まり、両次の世界大戦を経て、冷戦の時代とその終結がもたらした湾岸戦争までを射程に納めて、「20世紀の戦争」の世界史的位相を見極めようとする試みである。それは、9・11後の戦争の新たな位相に光を当てることにもなるであろう。

シンポジウム参加記

第5回秋季シンポジウム「ダーウィン・進化論と歴史学—『種の起源』刊行150周年によせて—」

白川 耕一（92年、東京都立大学学部卒）

2009年はチャールズ・ダーウィン生誕200周年、『種の起源』出版150周年に当たる。メトロポリタン史学会は、第5回秋季シンポジウムとして、「ダーウィン・進化論と歴史学—『種の起源』刊行150周年によせて—」を開催した。『種の起源』や進化論が自然科学だけでなく社会科学に対しても大きな影響を及ぼしたことはよく知られているが、シンポジウムは歴史学の側から進化論とその波紋を検討した。

小谷汪之氏「ダーウィンとマルクス・エンゲルス」

橋本順光氏（大阪大学）「黄禍論の歴史学—英国における東西人種闘争史観とその系譜」

吉澤誠一郎氏（東京大学）「清末思想史における進化論受容の多様性について」

佐貫正和氏（総合研究大学院大学）「日本における進化論の受容—丘浅次郎の進化論と進化論に基づいた社会認識を通じて—」

小谷報告は、マルクス・エンゲルスを例にとりながら『種の起源』が社会科学に与えた影響を検討した。ほぼ同時代の生きたダーウィンとマルクス・エンゲルスとの間で直接的なつながりはなかった。しかし、マルクスは『種の起源』に大きな関心を持ち、とりわけ、エンゲルスは進化論の中に自然科学と社会科学とを総合する可能性を見出し、自問自答し続けた。

橋本・吉澤・佐貫各氏は、イギリス、中国、日本における進化論や適者生存説の受容と展開について報告した。橋本氏によれば、19世紀末の欧米知識人は、「劣悪な環境下でも生存しうる日本人や中国人」がいずれ白人を圧倒するのではないかという不安を抱いた。不安は黄禍論へとつながっていくが、白人と有色人種との間の対立や最終戦争のイメージは未来小説などを通じて間に流布した。吉澤氏によれば、清末の近代化政策の下、ヨーロッパから紹介された進化論を、中国知識人は伝統に照らし合わせて一部読み替えながら受容した。「人種」を中心に歴史を考察する見方が西欧から日本を経由して中国に導入された際、中国知識人は「歴史的人種」に白人だけでなく「黄色種」も含めた。そこに吉澤氏は中国ナショナリズムの自己主張を指摘する。

佐貫報告は生物学者丘浅次郎の思想を検討した。生物観察を通じて自然界の一部として人間を見る丘は、いかなる階級・身分であろうとも人間は同等の一生物に過ぎないとする。万民平等の共和主義という丘の主張は天皇制と緊張関係に至った。

4人の報告から、生物学（進化、人種、生存競争など）を軸に社会や歴史を理解し、発展を予測しようとするヨーロッパやアジアの知識人の姿が浮かび上がる。だが、進化論から影響を受けていたとはいえ、ヨーロッパやアジアに現れた社会像や未来像がそれぞれの知識人や社会が置かれた立場によって大きく異なっていたことは興味深かった。ダーウィンや進化論を導きの糸にしなが、世紀転換期の思想の展開を世界レベルで検討するシンポジウムであったと言えよう。

【歴史随想】

モンゴル・サルヒット野外調査記(その1)

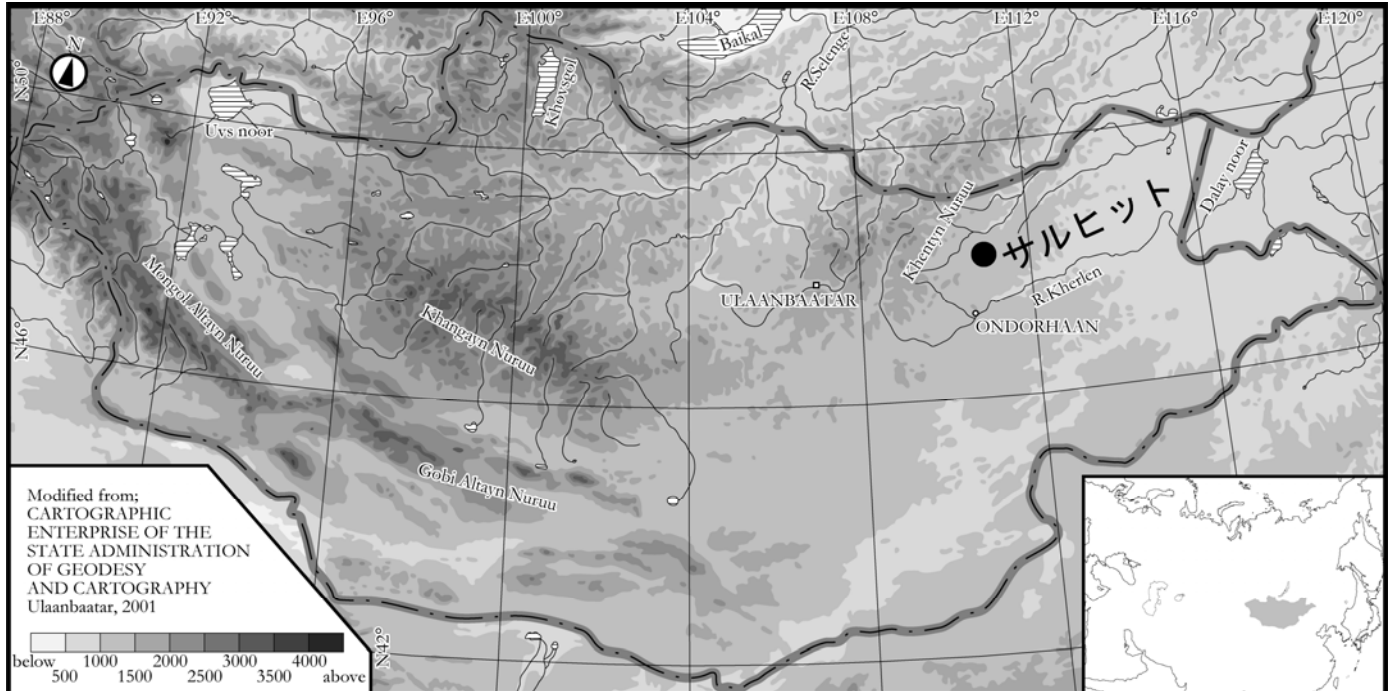
出穂雅実（首都大学東京、ユーラシア上部旧石器時代）

周知のとおり、考古学の分析対象である考古学的記録（遺跡・遺構・遺物）のほとんどは、野外調査を通じて回収される。野外調査は、途方もなく手間がかかる、いわゆる3K仕事だ。けれども私見では、考古学者の大半は、野外調査を心の底ではこよなく愛していて、なんだかんだ言ってもやはり野外調査に向かうのである。いまでこそ様々な考古学が展開され、それぞれ野外調査を経験しない考古学研究分野を個人的に展開することも可能であるが、それは過去の研究者たちが野外調査に明け暮れた（そして大量の遺物を回収した）からに他ならない。考古学研究全体で見ると、やはり野外調査は必要不可欠で、野外調査が減ると研究全体がおそらく活性しないと私は思っている。野外調査の重要性はいくら強調しても強調しきれないほど重要だ。

ここで私は、2009年に実施した仏蒙日国際研究チームによる、モンゴルの更新世人類化石の野外調査を、数回にわたって紹介したい。この調査研究の成果については今後正式な報告をおこなう予定であるが、これから述べるように、アジアの人類化石に関する国際チームの野外調査に参加し、経験を共有する機会は滅多にないため、ここでは正式報告に盛り込むことができない話題を中心に書きとめておきたい。

サルヒット人類化石発見地点の調査プロジェクト

これから述べるプロジェクトは、2006年11月にモンゴル北東部ヘンティー県ノロブリン郡サルヒット(第1図)で、古い形態的特徴を持つ人類化石が採集されたことから始まった(第2図)。



第1図 サルヒット人類化石発見地点の位置。ロシア・ザバイカル地方の国境までわずか数百キロメートルの地点にある。周辺の景観は広大なステップである。

この化石は、砂金採掘鉱山の労働者によって発見され、ウランバートル市に所在するモンゴル科学アカデミー考古学研究所（以下、IAMASと略す）に持ち込まれた。

- (4) 投稿原稿は、歴史学・考古学、歴史教育の分野に関する以下の種目のものとする。
- ①論文（図表を含み、24,000字以内；英文の場合は、8,000語以内）
 - ②研究ノート・史料紹介（同 12,000字以内；英文の場合は4,000語以内）
 - ③学界動向（8,000字以内；英文の場合は2,700語以内）
 - ④時評・提言（4,000字以内）
- (5) 論文、研究ノート（縦書き、横書きいずれも可）には、欧文で要旨（300語以内）を添付する（原文が英文の場合は日本語要旨800字以内）。また目次用の英文タイトルを付記する。
- (6) 原稿は、編集委員会が採否を決定する。その際、論文、研究ノートについては、編集委員会および編集委員会が委嘱した査読者の審査を経る。
- (7) 著者校正は、初校のみとし、校正時における文章の大幅な変更は認めない。
- (8) 注は、末尾にまとめる。
- (9) 原稿は原則として、印字された原稿（表、図表を含む）3部、フロッピーディスク及び別記送り状*（1部）を提出する。
- (10) 掲載の論文、研究ノート・史料紹介、学界動向については、別刷り50部を進呈する。
- (11) 原稿の送り先、照会については、

〒192-0397 八王子市南大沢1-1 首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系
国際文化コース（歴史・考古学分野）、河原 研究室気付
『メトロポリタン史学』編集委員会
Tel: 0426-77-2119（河原研究室） Fax: 0426-77-2112
E-mail: kawahara@comp.metro-u.ac.jp（河原温研究室内）
SNC47077@nifty.com（河原温）

送り状は学会ホームページ (<http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/>) からダウンロードしたものをコピーしてご使用下さい。



【事務局から】

- 年度末になりました。恒例の会計決算の作業中ですが、今年も会費未納が多く、頭を悩ませています。一人でも多くの会員が会費を年度内にお支払い下さるようお願いいたします。納入に際しては郵便振替(00100-0-537287 メトロポリタン史学会)をご利用下さい。一般5,000円、学生・院生3,000円です。
- メトロポリタン史学叢書2『いま社会主義を考えるー歴史からの眼差しー』（桜井書店）が刊行されました。近年の出版事情を考慮して、会員分を会が買い取ることになりました。後日皆さんのもとにお送りしますので、お待ち下さい。
- 4月の総会・大会でメトロポリタン史学会は満5歳となります。この間、会員数は150名前後にとどまっております。なかなか会員拡大が進みません。会がもう一回り大きくなるよう、皆様のご協力をお願いします。以下に会則を掲載しますので、周囲の方々への入会呼びかけに活用していただければ幸いです。

メトロポリタン史学会会則

- 第一条 名称 本会はメトロポリタン史学会と称する。
- 第二条 目的 本会は歴史学・考古学に関する研究とその公開を目的とする。

- 第三条 事業 本会は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。
- 一 大会
 - 二 シンポジウム・研究会・講演会・見学会等
 - 三 会誌『メトロポリタン史学』等の発行
 - 四 その他本会の目的を達成するために意義のある事業
- 第四条 会員 本会は次のうち、本会の会則を認め、会費を納入した者により構成される。
- 一 首都大学東京都市教養学部人文社会系国際文化コース歴史・考古学分野の教員・元教員と在学生・卒業生、および同大学院人文科学研究科史学専攻、同大学院人文科学研究科文化基礎論専攻歴史・考古学分野の在学者と在学した者
 - 二 東京都立大学人文学部史学科の教員・元教員と在学生・卒業生、および同大学院人文科学研究科史学専攻の在学者と在学した者
 - 三 上記以外の者
- 第五条 役員 本会の事業を遂行するために次の役員を置く。役員はすべて総会において選出され、任期は二年とする。ただし、再任をさまたげない。
- 一 会長一名 本会を代表し会務を総括する。
 - 二 副会長数名 会長を補佐し、会長に事故ある時は、その職務を行う。
 - 三 委員二〇名程度 会務を執行する。
 - 四 監事二名 会計および会務全般を監査する。
- 第六条 運営 本会に次の運営組織を置く。
- 一 総会 総会は毎年一回、会長が召集する。ただし、会長が必要であると認める時、あるいは会員の三分の一以上の要求がある時は、臨時総会を開催するものとする。総会における議決は出席会員の過半数をもって行う。
 - 二 委員会 委員会は会長・副会長・委員によって構成される。委員会は会長が召集し、本会の運営にかんする事項について審議決定する。
- 第七条 経費 本会の運営は会費・寄付金その他をもって行う。会費は総会において定める。本会の会計年度は四月一日から三月三十一日とする。
- 第八条 事務局 本会の事務局は首都大学東京に置く。
- 第九条 会則改定 会則は総会において、出席者の三分の二以上の賛成がある場合に変更することができる。
- 第十条 本会の会則は、2005年4月23日から施行する。

メトロポリタン史学会（会長 佐々木隆爾）

〒192-0397

東京都八王子市南大沢1-1

首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系 国際文化コース 歴史・考古学分野内

TEL : 0426-77-2110（木村誠研究室）

E-mail : mshigaku@comp.metro-u.ac.jp

ホームページ : <http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/>

郵便振替 : 00100-0-537287 メトロポリタン史学会